

平成クローズアップ。

町人文化
・
産業観光Culture of town people
industrial tourism

茶室「仙叟屋敷ならびに玄庵」。9つの景石を配して仏教の「九山八海」を表した茶庭が美しい。
茶室抜き(平成9年4月)▶

裏千家の歴史に通じる
「仙叟屋敷ならびに玄庵」

平成9年、芦城公園内の小松城三ノ丸仙叟宗室屋敷跡に茶室「仙叟屋敷」ならびに玄庵が完成しました。

この茶室は、加賀前田家三代利常公に仕えた裏千家4代千宗室の没後三百年を記念し、裏千家15代千宗室(現在は大匠・千玄室)家元より小松市に寄贈されたものです。

利常公は、1652(慶安5)年に千利休の孫・宗旦の四男、仙叟宗室を茶道茶具奉行として召抱え、小松城三の丸に屋敷を与えました。仙叟宗室は、利常公が66歳の生涯を閉じるまで仕え、その間、家臣はもとより城に出入りする商人や町役の町人にも茶道を教えました。

こうして、小松城下に茶の湯が広まり、小松の茶道は絶えることなく受け継がれ、風雅を愛する心は今もなお人々に息づいています。



古きよき佇まい

「こまつ町家」の魅力

小松の中心市街地には、約1100軒の伝統的な建築様式を誇る「こまつ町家」が存在し、町人文化が栄えた面影が色濃く残されています。

市では、平成20年度から「こまつ町家認定制度」を導入し、歴史・文化的財産として次代に残すための取り組みをしています。

こまつ町家の多くは、建物の側面が隣家と接する仕様で、屋根は切妻平入りの構造、通りに面しては格子戸が設けられているのが特徴です。

その一方で、古の佇まいを残しながら、現代風にアレンジした町家もあります。平成23年に改修工事を終えた「松雲堂」は、かつて産業九谷として発展した「ジャパン九谷」を代表する窯元の一つでした。昭和初期の町家形式をそのままに、市民の交流の場として整備され、ギャラリーや発表会などで利用されています。

後世に伝えていく

「コマツ」産業の礎

鶴川町の山中にある「遊泉寺銅山跡」は、世界的な建設機械メーカー「コマツ」のルーツとして有名です。

高知県出身で吉田茂元首相の実兄にあたる竹内明太郎氏は、この銅山の本格的経営を行い、小松鉄工所を経て「小松製作所」を設立しました。

竹内氏は小松製作所の設立以外に、地域の発展に大きな貢献を果たしています。昭和14年には竹内氏の意を汲む小松製作所の寄付によって小松工業学校(現小松工業高校)が設立され、平成23年には創立90周年を記念した「こまつ杜」が開園されました。その恩恵は脈々と受け継がれています。

現在は銅山跡の地元3町(鶴川町・遊泉寺町・立明寺町)を中心に、遺構や遊歩道の整備などが進められています。市では、産業遺産の充実に努めながら、産業の礎と先人達の精神を後世に伝えてまいります。

広がる
好奇心暮らしと産業が充実
「乗りものの動物園」

間もなく北陸新幹線も

小松空港に航空プラザ、日本自動車博物館にボンネット広場、さらにはこまつの杜、カヌー競技場など、市内を見渡すと様々な乗りものに出来ることに気付きます。

想像力豊かな子供たちにとっては、バラエティ豊かな乗りものが集まった「乗りものの動物園」のように見えているかもしれません。このことは交通の利便性はもちろん、ものづくり、スポーツ文化に至るまで、小松の底力がどれほど優れているかを示す証左と言えます。

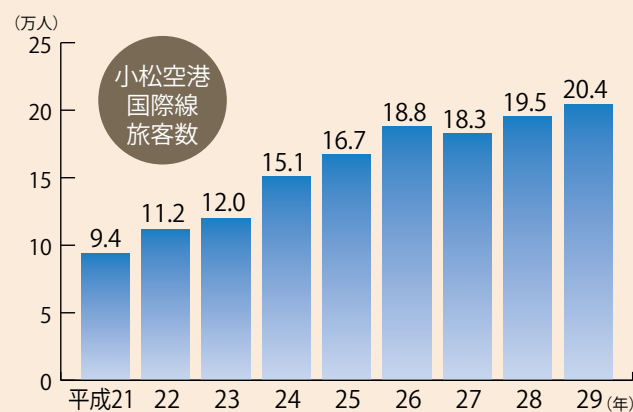
公共交通では、電気力で走る「宇宙バスこまち」が平成25年から運行を開始し、小松空港と小松駅をつないでいます。令和元年には香港定期便の新規就航。そして、令和5年には北陸新幹線小松開業が予定されています。

今後とも「乗りもの」を指標に、未来を担う子供たちにも分かりやすい形で、ワクワクいっぱい「魅力的な小松」の可能性を伝えていきます。



平成を知る直近データ

小松空港「国際線旅客数」



国際線旅客数

平成21年
9.4万人

2.17倍

平成29年
20.4万人

空港の国際化(国際便・国際貨物便の充実)と、観光・ビジネスでの訪日外国人が増えています。世界とつながる「国際都市こまつ」は、さらに進化を続けます。